
東方夢想花

斎藤 孝之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方夢想花

【Zコード】

Z4875

【作者名】

齊藤 孝之

【あらすじ】

妖祭館での出来事から早数ヶ月が経過し、春が訪れた。幻想郷で暮らす麻耶は穏やかな陽気に誘われ、お花見に行くことにした。

どこがベストの場所であるか調査をした所、ある村の名前を耳にする。そこは一年中桜が咲き誇り、村が桜で覆わされていて綺麗だとう。

わくわくしていくとそこは一面桜で覆われており見事であった。お

花見をしながら満喫している麻耶であったが、辺りを見渡すと周りにいる者は花を見るわけではなく、桜に何かを祈るかのようであつた。

不思議に思いつつ花を見ていると、麻耶の視界にある人物が目に入つた。それは幼い頃亡くなつた弟の姿であつた・・・。

麻耶が何故ジャーナリストを目指すことになつたのか。そしてこの村の正体とは。林 麻耶が大活躍の第2弾！

プロローグ

晴れたその日は絶好の買い物日和だった。私はまだ幼い弟の手を引いて近くの商店街に向かっていた。

弟は買い物に行けることが嬉しいのか、いつも以上にはしゃいでいて私もそれを見てはしゃぎながら歩いていた。

商店街に近づくにつれ私たちの足は弾む。普段見る何気ない風景も、まるで別の景色のようだ。

お姉ちゃんと言う弟の声が私を笑顔にする。私は弟が大好きだった。

商店街が見えて、横断歩道に着く。信号を確認し青になつてから私は弟と手を繋ぎ渡り始めた。

近くで何かの声がするが、私は何の事を言つているのか分からなかつた。ただ分かつたのは何かに体を押されたという事だった。

気がつくとそこは赤の世界だった。喧騒の中私は何もできなかつた。

その日、私は最愛の弟を失つた。

第一章

第一章

妖祭館での出来事が終わってから早数ヶ月が経過した。幻想郷には春が訪れ、穏やかな気候で眠氣を覚える程の穏やかな日が続いた。そんな中私は何をやつて居るのかというと・・・・

「見て、麻耶！あの子の下着可愛いですね～！」

相変わらず文に連れられてパンチラ写真を収めていた。まったく他にやる事がないのかしらと我ながら疑問しか浮かばない。

「はいはい。いいわね～」

私は適当に相槌をうつた。文はその返事が不満だったのか

「気のない返事ですね～。一体どうしたのですか？」

「他にやる事がないのかな～、と思って。一体私たちはいつまでこんな事をしているのよ」

「またそれですか。実際に事件が起きている訳でもないし、二一ズがあるのですよ。それを追い求めるのが私たちの使命じゃないですか！」

「使命・・・・ね」

私たちの使命がもしパンチラ収集だつたら泣けてくる。第一、普通の人気がこれを見たらただの変態に思うだろう。女子高生の趣味はパンチラ写真収集！なんて記事が出たら私は一生外に出ることとは出来ないであろう。

「はあ・・・・。いい天気ね～」

近くにあつた木に寄りかかりながら私は思わず呟いた。

日本と同じように幻想郷にも四季があり、見事な桜が咲き誇っていた。日本人の麻耶にとつて春はまた特別であり、ある一つの行事をまだしてないことに気づいた。

「ねえ、文？」

「はい。なんですか？」

「ここいらへんで一番綺麗な桜はどこにあるの？」

「そうですね～・・・。あそこですかね」

「あそこ？」

「はい。ついて来てください」

そういうと文はテクテクと歩いて行ってしまった。

「ちょ、ちょっと待ってよ！」

私は慌てて文の後を追いかけた。

「ねえ、文。ここ？」

「ええ。綺麗ですよね」

確かにここには綺麗な桜が植わっていた。ただ・・・

「でもここ、幽々子さんのお屋敷じゃない！」

そう、文が連れてきたのは幽々子の屋敷だった。いくら見事な桜があるといつても人の屋敷にズカズカ入つて行くことに私は躊躇した。

「大丈夫ですよ。さあ、入りましょう」

文はまつたく気にすることなくスタスタ中に入つて行ってしまった。「まったく文は・・・。幻想郷の人たちに遠慮という事はないのかしら。」

私は思わず呟いたが、そんな事は無いと思い直した。きっと文が特別なのだ、と。

屋敷の中に入るとそこでは縁側で桜を見ながらお茶を飲む幽々子さんと傍に仕える妖夢の姿があった。

「あら～、こんにちは」

幽々子さんは私たちを見かけるとお辞儀をして挨拶してくれた。女の私が見ても素敵だなと思えた。

「こんにちは。幽々子さん、妖夢」

「こんにちは」

妖夢は一仕事を終えた後なのか、服の端に少し草が付いていた。

「いや～、こここの桜は見事ですね～」

気が付くと文はまるで住人の如く寛ぎながら幽々子さんの隣でお茶を飲んでいた。

「ええ、こここの桜は素晴らしいですよね～。」

幽々子さんは別段咎める様子も無く文と談笑していた。なんだか色々気にしていた私が馬鹿みたいだつた。

「そうね～。ところで文

「もつと沢山の桜がある所らしい？ 私、そこでお花見しようと思つただけれど

「沢山ですか？ そうですね～・・・」

文は少し考え、

「ちょっと思いつきませんね。すいません」

「そんな謝ることじゃないわよ。でも残念ね～」

私はどうしようか悩んでいると

「では桜村なんて行つてみてはどうですか？」

幽々子さんが思いついたように教えてくれた。

「桜村ですか？」

「ええ。その名の通り、町中が桜で覆いつくされていて、壯觀なん

ですつて。見物客も多くて今の時期は見頃なんじゃないかしら」

「へえ～、文は行つたことある？」

「いえ、無いですね～。初めて聞きました」

「じゃあ、そこに行きましょう。明後日行きましょつか。」

私はテンションがあがり文に提案したが

「すいません。私一週間ばかり留守にするので行けないんです。」

「え？ そうなの？」

「はい。なので別の方と行つてください。」

「そう・・・。なら仕方ないわね」

「なら私が・・・」

「駄目です。お嬢様」

幽々子さんが思わず立候補したが、ピシャリと妖夢に言い切られて

いた。

「いいじゃない・・・。ケチですね」

「ケチって・・・」

私は二人のやり取りを見ながら一人はいい組み合わせなのだと改めて思った。

「では幽々子さん、場所がどこだか分かりますか?」

「あ、はい。ちょっと待ってくださいね」

幽々子さんは紙にスラスラ地図を書くと

「これで分かるはずです。写真沢山撮つてきてくださいね」

「はい。任せてください」

私はお礼を言い、お花見のパーティを探すために文を残し屋敷を後にした。

とりあえず私は博麗神社に向かうことにした。理由は特には無い。なんとなく靈夢と行きたいなと思ったからだ。

「靈夢〜、いる?」

私は神社の中に声をかけた。しかし返答はない。

「あら、いないのかな?」

私はもう一度声をかけ、少し考えた後中に入つてみることにした。襖を開けると靈夢はいた。しかし何やらブツブツ言つていて聞こえていないようだ。

「なんだ靈夢いるんじゃない。どうしたの?」

「あ、麻耶。久しぶりね」

「ええ。声をかけたのに返事がないから入つてきちゃつた。それでどうしたの? 何やらブツブツ言つていたみたいだけだ」

「うちの神社の参拝客が増えないのよ。なんとか年を越すことはできただけど来年は分からないからどうしようか考えていてね〜」

どうやらこの神社は本格的に危険らしい。まあ参拝客が来たとして多く訪れなければ賽銭も多くないし、それを支えにしている靈夢にとつてまさに死活問題なのだろう。

「ところで麻耶は何の用なの？」

「ああ、忘れてたわ」

私は用事を思い出し靈夢に花見の件を説明した。

「へえー。いいわね。行きましょう」

「どうやら靈夢は乗り気なようだ。

「じゃあ明後日にな。他にも誰か誘つてみるから」

「分かったわ」

私は神社をして、道を歩きながら他に誰を誘おうか思案した。
かといってすぐには思いつかない。

「まあ靈夢と一人でも構わないか。靈夢だったらゆっくりお花見で
きそうだしね」

下手に人を誘うと、お花見というより宴会と化してしまった。以前あ
つたピクニックがある一部の人間（？）によつて大宴会と化してし
まつたことを思い出し、なんとしてもそれを回避しなければならな
いと思つた。

ガサガサ

気が付くと後ろの方から何やら音がする。それは道端にはどう見て
も不自然な草があつた。そしてそれは私が歩くと一緒についてくる。
「まったく・・・・。どこに可動式の草なんてあるのかしら」
草をよく見ると大きなリボンが見える。そんな格好をしている人物
は一人しか思いつかない。

「何やつているのよ、チルノ」

私が声をかけるとビクとした。気がつかないとと思っていたのだろうか。

「早く出てきなさいよ。ばれてるから」

私は再びチルノに声をかけた。するとしばらくすると草の中から何
故か自身満々なチルノが姿を現した。

「よくアタイの偽装を見破つたわね。さすが麻耶ね」

こんな事を見破れないなんて、世界中探しでも見つからないだろ？

「アタイの偽装は完璧だったのに……」

訂正しよ？ 世界中探さずとも田の前にいたのだ。

「あのね……まあ良いわ。それで何の用？」

私は下手に絡むと面倒なので、さつわと済ませる」とこした。

「えっと……あのね」

チルノにしては何やら歯切れが悪かった。一体どうしたのだ？

「何？ 用があつたんじゃないの？」

「うん……あのね」

「うん」

私はチルノの言葉を待つていると

「お団子ー！」

「…………はあ？」

「お団子がどうしたのよ？」

「お団子が食べたいな～って」

「食べれば？」

「え？」

「じゃあね。私忙しいから」

私はその場を後にした。さてこの後どうじよ？

「ま、待つてー」

チルノは私にしがみ付いてきた。無かったことにしようと思つたが、必死にしがみついているのか、なかなか動くことができなかつた。

「な、何よ？」

「麻耶～、分かつてているんでしょ？」

そんな涙目で言われても。なんとなくそんな気はしたのだ。恐らしく

チルノはお花見と一緒に連れて行けと言つているのだ？

「はあ…………あなたも行きたいの？」

このままじや家に行きたくても行けない。私は仕方なしにチルノを誘つこした。

「う、うんー」

「しょうがないわね。じゃあ来ても良いわよ」

「ほ、本当？」

「ええ。というかそう言わないとあなた離さないでしょ？」

「うん！」

うんつて……まあしょうがない。チルノ一人なら別に構わないだろう。

「じゃあ明後日に行くから。遅刻したら置いて行くからね」「分かった」

チルノは先ほど涙目から一瞬で笑顔に変わり去つていった。

「団子、団子、団子。団子大家族」

何やら不思議な歌を歌いながら去つて行くチルノを見ながら私は思わずため息が出た。

「はあ・・・・・。まあいか

私はこれ以上人を誘うこと止め、お花見の準備の為、家に戻ることにした。

お花見の当日が来た。その日は天候に恵まれ快晴。風も無く穏やかでまさにお花見日和だった。私は待ち合わせの場所で待っていると「ザツ」と後ろから人が来る音がする。

「番号！」

どうせ3人しかいないのだからそんな事をする必要は皆無だつたが、一度やってみたかったのだ。私は後ろを見ずにそう言った。

「1

これは靈夢だ。意外とノリがよかつた。

「2～！」

これはチルノだ。やけにテンションが高い。どんだけ団子が楽しみなんだろう。

「3！」

「4！」

・ ・ ・ ・ 私は幻聴を聞いた気がした。 3? 4?

「5!」

「6!」

番号は一向に終わる気がしない。私は思わず後ろを見てみる事にした。

「な、何これ!?

そこには物凄い人がいた。一体どういうことなのだろう。

「ちょっとアンタ! なんでこんなに人がいるのよ?」

私は思わずそこにいた村人A的な人物を捕まえ、喰いついた。

「え? タダで飯をくれるって聞いたんだけど?」

「え? 僕は麻耶ちゃんがデートしてくれるって・・・」

「え? かくし芸が始まるんだろ?」

どうやら何者からの情報のリークがあつたらしい。そしてそんな人物をするなんて不届き者は一人しか思いつかなかつた。

「あの鳥天狗め・・・」

目を輝かせながらこの工作をしている姿が容易に目に浮かぶ。しかしまずはやらなければならぬことがある。

「すう~」

私は思いつきり息を吸い込むと

「解散!!--」

と大きな声を出し、群衆を解散させた。

三十分後、やっと群衆がいなくなり、その場にいるのは私、靈夢、チルノの三人になつた。

「さて、やつと出発できるわね」

靈夢は読んでいた本を閉じるとこちらに歩み寄ってきた。チルノは飛んでいる蝶を無邪気に追い掛け回している。それにしても靈夢が読書をしている姿をあまり見たことが無かつた。なので何の本を読んでいたのか気になり聞いてみると

「靈夢、何の本を読んでたの?」

「え？ これ？」

靈夢は私が自分が読んでいた本を気に書けたことに何故か喜んでいるように思えた。そして嫌な予感がした。

「うん？」

本の表紙がチラッと見えた。多少ボロボロになつていて、恐らく私の世界から流れてきたものだと分かった。そしてその表紙には・・・

「えっとね！ これは」

「い、いい！ 説明いいから！」

私は何も見てない！ 決して美少年が一人裸で抱き合っている所なんて見えなかつた！

「そう・・・。せつかく見つけたのに・・・」

私は夢であったと結論付ける事にした。

「私は靈夢に無垢なままでいてほしかつたわ・・・」

「何か言つた？」

「い、いいえ。何も」

私はこれ以上この話題を続けないよう話を切り、お花見の場所に向かうことにした。

「チルノ～！ 行くわよ
「は～い」

私、靈夢、チルノの順で歩きながらさ桜村に向かうことにした。今はまだ知るはずも無かつた。そこで塞がつた傷が再び開かれる事になるとは・・・・

第一章

第一章

「地図で言うとこっちみたいね」

私たち3人は地図を持つ靈夢の先導で桜村を指し向かっていた。最初はチルノが自分で持つというわかつたが、前回の事を考え私は全力で阻止した。当然の結果である。

「あ、あれみたいな」

そういうしている内に見えてきたようだ。やはり靈夢を連れてきたのは正解だったようだ。

「お花が綺麗だー！」

「あ、本当ね」

まだ村に入っていないが、既に桜が村中に咲き誇っていることが窺えた。花のいい香りが鼻をくすぐる。これは村に入ると絶景だろう。

「お団子、お団子！」

チルノは既に頭の中は団子でいっぱいなのだろう。皿が団子になっている。

「あなたは本当に……。桜を見て何にも思わないの？」

私は思わずため息をこぼしている

「まあいいじゃない、麻耶。それもお花見の醍醐味なんだし」

「まあそなうなんだけどね」

私も持ってきた弁当を楽しみにしている。まあ今回は放置する」とにするか。

「凄い……」

「本当ね……」

村の中に足を踏み入れた私たちは思わず息を呑んだ。他ではお田にかかる立派な桜が村を覆いつくしている。そして風によつて

舞う花びらがひどく幻想的に見えた。

「これはお花見が楽しみね。さつそく場所を探しましょ！」

私は逸る思いを抑えきれず、最高の場所を探すために歩き出した。

「ま、待つてよ麻耶。そんなにあせらなくても」

靈夢は苦笑しながら私の後に続き歩き出した。チルノは……。まあ放置でいいか。

しばらく歩いていると大きな桜の木が見えてきた。周りに人もいないし、ここが最適かもしれない。

「靈夢、ここにしない？」

「いいわね。さつそく始めましょうか」

どうやら靈夢も待ちきれなこよつだ。言ひやせぬや、せひやへレジャーシートを敷いている。

「では、かんぱ~い」

「乾杯！」

私たちは持つてきた酒を注ぐと、乾杯の音頭で飲み始めた。

「あ~、おいしい！」

「本当ね。普段より何倍もおいしい気がするわ

私たちは酒をチビチビ飲み始めた。もしここに約数名がいたら大宴会の再来であつただろう。そうならなくて本当によかつた。

「うん？ どうかしたの、麻耶？」

「いえ、なんでもないわ。それよりお弁当を食べましょうよ

「そうね。私結構作つてきたから沢山食べてほしいわ

「まかせて！ 私も作つてきたから食べてね」

お互に作つてきた弁当を広げる。靈夢のお弁当はおにぎりを主体としたものだつた。おかずはから揚げ、卵焼き、ウインナーといつたもの。これは男の子には嬉しいだろう。……私は女の子だが。「あら、麻耶はサンドウイッチね

「うん」

私はサンドウイッチ。ツナや卵といったものだ。とりあえず、かぶらなくてよかつた。

「ではいただきます

「いただきます」

私たちはお互いの弁当をしばらく食べ比べた。それは穏やかな時間であった。だからだらり。気が付くとぼんやり桜を見つめていた。

「どうしたの、麻耶？」ぼんやり桜なんか見つめて。酔っ払った？

「いえ、大丈夫。それより片付けさせちゃったわね。ごめんね」

「いいのよ。それよりどうしたの？」

「うん。少し昔を思い出してたんだ……」

「そう……」

片付けを終えた靈夢は自分のコップに酒を注ぐと私の横に並んだ。

「・・・・・」

しばらく私たちは無言で桜を見ていた。しばらくして靈夢はポツリと

「ねえ麻耶。聞いても良い？」

と私に問いかけてきた。

「うん。何？」

「麻耶はなんであんなにスクープとかを追い求めているの？」

「そうね……」

私は少し考え

「有名になる為……かな」と答えた。

「有名？」

「そう、私はジャーナリストになりたいの。でも普通のジャーナリストになつても、それじゃ記事があまり人の目に触れる事は無いわ。だから有名になるための手段の一つとしてスクープを追い求めているつていうのが正しいかも知れないわね」

「なんだ……でもじゃあ何でそんなにジャーナリストになりたいの？」

「それは……」

私は言うか否か悩んだ。

「べ、別に言わなくてもいいよ。言いたくない」ともあるだらう」

靈夢は私の考えた様子に慌てて言つた。私は苦笑し

「大丈夫よ」

私は言う覚悟を決めた。思えばこの事を人に言つのは初めてなので
はないだらうか。これもこの景色と酒のせいかも知れないわね。

「私がジャーナリストを目指し始めたのは本当に些細なことなのよ
私はポツポツと考えるように話始めた。

「私は昔弟がいたの」

「弟？ 麻耶に？」

「ええ。優つて言つてね。言葉の示す通り心の優しい子だった。」

「へえ、そうなんだ。つて昔？」

「ええ・・・死んじやつたの。事故でね」

「ごめんなさい！ 私余計なことを・・・」

「だから大丈夫だつて」

私は苦笑した。そして靈夢の心遣いに感謝した。この子は本当に優
しい子なのね。

「昔、私たちは母親に言われて、近くの商店街に買い物に行く」と
になつたの。その日はとても良い天氣で絶好の買い物日和だつたわ
あの日は本当にいい天氣だつた。まるでどこまでも飛んでいけるよ
うな・・・。

「本当は私一人で行くはずだつたんだけど、優がどうしてもお姉ち
ゃんと一緒に行くといって聞かなくてね。私もしきりがなく二人で
行くことにしたの。でも私は本当は嬉しかつた。だつて、優が私を
好きでいてくれてるようだ。私も優の事が大好きだつたから」

「そう・・・。仲良し姉弟だつたのね」

「そうかもね。商店街へ続く道はよく歩くから見慣れていたけど、
私は優が一緒に並んで歩くと別の景色に見えたの。道の端に咲く花
も、民家に咲き誇る草木も。何もかもが素晴らしいものに思えたわ。
まったくなんて姉バカよね」

「そんなことは無いわ。素晴らしい姉弟だと私は思うわ」

「ありがと」

きつとこの子は本心で言つてくれているんだろう。私は続きを始めた。

「商店街の前には横断歩道があつてね、私は青に変わるのが待ちながら弟に何を買つてあげようか考えるのが楽しかつた。行く前に母親に一人で何か買ひなさいつてお小遣いを貰つていてね。それを弟には内緒にしていたから驚かす事を考えるのが乐しかつた。」

本当にあの時は楽しかつたな・・・。

「信号が青に変わつて私たちは手を繋ぎながら歩き始めたわ。しばらく歩いていると周りの人人が何か言つてゐる気がしたけど私は何を言つてゐるかわからなかつた。ただ気が付いた時には何かに体を押されていたわ。そして目の前に赤の、血の世界が広がつていたわ。その時は分からなかつたけど優が私を助けてくれていたのね・・・。」

「麻耶・・・」

「後からの話で、原因が運転手の飲酒、及び居眠り運転の不注意である事がわかつたわ。その後私は子供心に怒りを覚え、新聞を見ると掲載はほんの小さなもの。思わずテレビをつけたわ。こんな悲惨な事件が取り扱われないはずがないってね。子供心は単純よね。そんな地方の事件なんて全国放送で放送されるはずが無いのに」

「麻耶！」

「ニュースでやつてたのは芸能人の交際疑惑一色だつたわ。そりやそうよね。そっちの方が人の気を惹きやすいんだから。でもね、その時の私は信じていた。こんな悲惨な事件が報道されないはずはない。きつとニュースで報道で大々的に報道されているんだつて」

あの時の悔しさは今でも忘れないな。

「私はその時に思ったの。こんな世の中は間違つてゐる。世の中はそんなくだらない事を報道する事より伝えなければならない事が沢山あるんだつて。だから私は！」

「麻耶・・・。『ごめんね』

気が付くと私は靈夢に抱きしめられていた。そしてその時初めて涙

を流していることに気が付いた。

「ごめんね・・・。そんな過去を話せりやつて。もういいから・・・。大丈夫だから」

靈夢は優しく慰めるように抱きしめてくれた。だからだらう。今まで抑えてきた気持ちが溢れてきた。

「私が・・・・・、私がもっと注意していれば・・・・・。私があの時の周りの声に気づいていれば優は助かったかもしれないのに。優は生きてたのに・・・・・。ごめんね・・・・・優・・・・・」

私は靈夢に抱きしめられながらただただ謝ることしかできなかつた。そして多くの涙を流す事しか・・・・・。

「大丈夫？」

「ええ・・・・・。ありがとね、靈夢」

どれだけの時間が流れたのだろう。私が泣き止むまで靈夢はずつと抱きしめてくれていた。

「話がまだだつたわね。えつと・・・」

「もういいわよ、麻耶。辛いでしょ？」

「うん。でも靈夢がいるから。だから大丈夫」

「そう・・・・・。わかつたわ」

靈夢はそう言つと私の手を繋いだ。きっと彼女の大丈夫だという合図なのだろう。

「それから私はどうしたら正しい事を伝えられるかつて考え始めたわ。最初はテレビに關ろうと考えたんだけど、テレビは視聴率が何より大切なの。だからどんなに頑張つても駄目なんだと分かつたわ」「視聴率・・・・・。つまりどれだけの民衆が見ているかという数字の事ね」

「ええ。それで色々考えていたときある一冊の本を見つけたの。それはある有名なジャーナリストが書いたものなんだけど、それは今の世界が飢餓に苦しんでいるというものだつたわ。そしてそれは有名な人が書いているという事で多くの注目を集めていたの。そして

テレビでも多くの報道がされていたわ。本は私が知らなかつた多くの事が書かれていたわ。それは日本では知ることができなかつた多くの悲しくも、生きる者としては知らないはいけなかつた多くのことが

「なるほどね・・・だから麻耶は」

「ええ。だから私はジャーナリストになることに決めたの。有名なね。そうなれば私は誰に制約されることなく正しく、伝えなければならぬ事を伝えることができる。芸能人のくだらない、どうでもいい事よりね。」

一通り話しあると私は靈夢に寄りかかった。

「こんな事話したの初めてだわ・・・」

「あらそつなの? それは光栄ね」

「ふふ・・・」

私は靈夢が居てくれて本当に良かつたと心から思えた。

「ねえ麻耶、なんか変じやない?」

「うん? 何が?」

「あのお婆さん何か祈つてるよ? だけど・・・。この桜、何か特別なのかしら?」

「さあ・・・。幽々子さんは何も聞いていないけど。でもそう言わると周りには何人もが桜に祈りを捧げているわね」

私はどうしたのか聞くために近くのお婆さんに話を聞くために近づいていった。

「ねえお婆さん。どうかしたのですか?」

返事は無い。それだけ必死に祈りを捧げている。

「聞こえていないみたいね。うん?」

お婆さんが何やらブツブツ言つているのが聞こえた。それは

息子を・・・。どうか息子を生き返らせて・・・。

そう聞こえた。

「受験合格や健康とかならまだしも・・・。普通のお願いじゃないわね」

「そうね。靈夢、しばらく自由行動にしましょう。何かこの村へんな気がするわ」

「わかった。一時間後集合ね」

「了解」

私たちは情報収集するために一手に分かれた。しばらく歩いていると多くの人間がいた。そして全員が祈りを捧げていた。

「まさか死者を蘇らせるなんてバカなことは無いわよね。」

私は思わず以前の妖祭館での出来事を思い返した。娘を生き返らせるために起こしてしまった悲惨な出来事を。

「とにかくもつと情報収集をしないと・・・。あら?..」

目の前には小さな屋台があつた。そして旗には「だんご」と書かれている。どうやらここは団子屋らしい。

「やついえはチルノはどういったのかしら」

私は団子屋をスルーし情報収集に急ぐことにした。しかし通り過ぎる直前に聞いた

「お譲ちゃん、沢山食うね~」

「あたりまえだもん。アタイ最強だもん」

という会話に足を止めた。どうやらまともな人がいるようだ。そして今会話を聞く限りチルノもいるらしい。

「入つてみるか・・・すいません!」

「はい、いらっしゃい」

中に入つて行くと皿を山盛りにして団子をパクつくチルノと、人の良さそうな店主がいた。

「らつしゃい、何にします?」

「じめんなさい。ちょっと話を聞きたかつただけなんですが」

「そつかい・・・で話つて?」

「実は・・・」

私は桜に祈りを捧げている人達のことを聞いてみた。

「なんだい、お客さんそれを知らずにここに来たのかい？」

「え？ 何か知っているの？」

「知つていても何も・・・。ここがどこだか知つていてるのかい？」

「知つているつて・・・。ここは桜村でしょ？」

「それは10年前の名前だな。今の名前は蘇桜村だよ」

「蘇桜村・・・」

「つまり蘇る桜の村。ここは死者を蘇らせる不思議な村だ。」

「そんな・・・」

まさかそんなことが本当に起きるのだろうか・・・。

「いけねえ・・・。もう店じまいの時間だ。悪いけどここまでにしてくれるか」

「分かったわ。ありがとう。それじゃ」

「アタイも行く！」

二人は外に飛び出す。しかし足は動かない。あるえ？

「お金・・・・・ハラエ」

「まつたくどんだけ団子食べたのよ！」

「『ごめんなさい・・・』

私が思いつきり拳骨をしたのでチルノは涙目だ。それにしても

「はあ・・・もういいわ。そろそろ靈夢と約束した時間ね。それじ

や

私はもう一度お礼を言うために後ろを振り返った。するとそこには

「あ、あれ？ 無くなってる。嘘！？」

そう、そこには最初から何も無かつたかのよつた感じであった。

「また面倒な事に巻き込まれたみたいね。でもいいわ。絶対解決して見せるわ。チルノも働きなさいよ」

「わ、わかった！」

私たちは再び桜の木に集まつた。どうやら靈夢も似たような情報を持つてきたらしい。

「どうやら死者が関係しているようね」

「ええ。でも任せて。伊達に巫女じゃないわ」

「チルノも頑張るよ～」

そうだ、チルノはまったくの戦力にならないが巫女の靈夢がいる。
これは力強い！

「よ～し、頑張るわよ」

「お～！」

・・・・・チルノしか声がしない。

「靈夢？」

探せど探せど靈夢の姿は無かった。そして一枚の手紙が落ちていた。

第二章

第三章

頼りの靈夢の姿はそこは無かつた。そして気が付けばそこには一枚の手紙・・・。

「一体どうしたつて言うの?」

私はその手紙を開けてみることにした。その手紙には

暇だったので靈夢は一週間預かつたわ。代わりの物を送つたから頑張つてね

「はあ!?

何が何やらサッパリだが、靈夢は連れてかれてしまつたらしい。「一体何なのよ・・・・・。これから靈夢がかなり重要になつてくるつていうのに・・・・。それにしても一体誰がこんな事を? それに代わりの物つて何かしら?」

私が思案していると

「ねえねえ、麻耶?」

「何、チルノ?」

「あそこに何が落ちてるよ?」

どうやらそれが代わりの物のようだ。一体何が送られてきたのだろう・・・・・。

私は近づいて拾い上げた。「こ、これは・・・・・。

「うわ〜・・・・・。大きいね!」

それは成人男性が見るような、いわゆるアダルト雑誌だつた。しかもやたら胸が大きい人が多かつた。というかチルノがガン見してゐる!

「チルノ、あんたにはまだ早い!」

私は慌ててチルノから雑誌を取り上げる。そして雑誌を手で握り締

めた。

和をハナにし、こんな物作の役にキ立たないじつが

しかも何でよりにもよつてこんな・・・・、胸の大きいものばかりなのよ！

卷之三

何やらチルノが私のほうをジッと見ていて。しかもある部分を。

チルノは鼻で笑つた。こ、この野郎・・・。

「え？ どうして？」

私がついた嘘にチルノが飛びつく。私が指差した方を見てキヨロキ

四百三十九

私は自分のリミッタを解除し、全力でチルノのボウを蹴り上げた。

「ナニヤ」

私は肩で息をしながら、自分の胸を見つめた。

和に居て思ひがちで、自分の腹を貪るのも力

確かに大きいのは憧れるけどね。そんな事を考えながら私はことの

「三編」

り拙いわね。一人で解決しないと。

さうなと男は詰が連れてこなかつた事が悔やまれる まあ更言

「とにかく青報収集を続ナムシが無キアリ叶ナ。パントカリがハナ

い以上、地道な行動をしてかないと。ここであれこれ考へても仕方

元より行動している方が性に合つてゐるのだ。さうそく行動を始めよ

う。

「まずは情報収集ね。これをまず徹底してみよう。」

私はとにかく手当たり次第に村人に声をかけてみることにした。

「う～む・・・・・」

結局話しかけまくった結果得られた情報ははつきり言つて大した事は得られなかつた。得られたのは唯一のこと。

皆、死者を蘇らせるよう祈り続けている

といふ事。話しかけても返事をしてくれる人はいなかつたが、呟く言葉を聴いてみてそれが分かつた。

「本当に死者が蘇ることなんてあるのかしら？」

普通に考えればそんな事はあり得ない。しかしここは妖怪が住む幻想郷。あり得ない事が起きても不思議ではない。ただ・・・・・。

「皆なんだか怖いのよね・・・・」

そう。皆様子が尋常ではないのだ。もし、死者が蘇るという事で皆が訪れているのならもつと希望に溢れている気がするのだ。もちろん縋る為にここに来ている事を考えて、ここまで鬼気迫るのだろうか？。

「やつぱり起こるかどうか分からないから、皆半信半疑のかしら」私はふと幼い頃失つてしまつた最愛の弟を思つた。まだ幼かつた弟が生きてたら今頃どんな生活を送つていたのだろうか。身内臱膚があつたことを考へても弟は運動がうまかつた。もしかしたら部活に入つて活躍していたのかもしれない。そんなことをふと考へてしまつた。

「優・・・・・」

私は思わず祈つた。もしここが本当に死者を蘇らせる事ができるなら優を蘇えらせて欲しい。私はもっと話したいことがあつたのだ。

「麻耶？」

私はチルノがかけた声で正気に戻った。気が付けば長い間祈っていたのかもしれない。

「ああ、チルノ。あなたどこ行つてたの？」

「アンタが蹴つ飛ばしたんじゃない！」

「どうだつけか？ 私にはそんな記憶は無い。きっとチルノの妄想だろう。」

「うう・・・。お尻痛いよお～」

「まあまあ、そんな妄想話言つても仕方ないわよ。まだ調査は進んでないんだし、アンタもしつかり働きなさいよ？」

「も、妄想じやないもん！」

チルノが抗議を何かしているが、記憶に無いのだから仕方ない。相手にすることはないだろう。

「それにしても八方塞ね。情報収集はもうしたし。どうしたら良いのかしら・・・」

ここに靈夢がいたら何かアドバイスが得られたかもしねりないが、いなし事をあれこれ言つても仕方がない。何か別の方法を探さなくては。

「ぶう～」

何やらチルノが膨れている。

「何よチルノ。まだ何があるの？」

だんだん私はチルノの相手をすることが面倒になつてきた。・・・

・そこら辺に埋めてやろうかしら。

「いいもん・・・。せつかくアタイいい情報を掴んできたのに！」

チルノはそう叫ぶといじけた様に地面に文字を書き始めてしまつた。というかこいつは何といった？

「チルノ、本当なの？ いい情報つて？」

「い～！ 麻耶になんて教えてやらない。麻耶なんて大嫌い！」

どうやら本格的にヘソを曲げてしまつたらしい。いつもなら放置しておく所だが何分手が見当たらない状態なのだ。私はどうやってチルノの機嫌を直せるか考えた。とりあえず謝つてみるか。

「ね、チルノ。私が悪かったわ。情報教えてくれない？」「ブイ！」

「こ、こいつ！ どうやらチルノは徹底抗戦の模様。こっちの事は聞く耳を持たないらしい。」

「さて・・・・」

私は真剣に考え始めた。まず情報を整理しよう。最初にターゲットの情報からだ

氏名
チルノ

うん。まずはここは問題ではない。といふかここに問題がある奴はいるのだろうか・・・。

性別
女性

まあ女性というより女の子という方が妥当だろうが。ここも問題ないだろ？・・・・まさか男？無いよね・・・。
「でもここは攻める場面かもしれないわね」

自分もそうだから分かるが、女性にとつて容姿を褒められることは嬉しい。たとえ在り来たりな言葉であったとしても悪い気はしない。

「ここには保留ね」

次行つてみよう

特徴
バカ

もはやチルノを考えたときこれに尽きるであろう。ならば普通の人ではまったく通用しそうにないが、チルノには効く方法を考えてみ

る方がいいかもしない。

「よし！」

私は作戦を思いついた。これはチルノにしか効果が無い作戦。しかしチルノだから効果的である作戦。今、その作戦の火蓋が切つて落とされた！

「あ～あ。もう方法が無いわ・・・」

まず私は明らか手段が無いことをまるで独り言のように言い、落ち込んで見せた。向こうが聞く耳を持たないのであれば、返事を期待せずこちらのことを聞かせてやればいいだけだ。

「私の頭じゃこれ以上動くことはできないわ。どこかに天才はいないかしら？」

チラッとチルノを見ると耳がピクッと動くのが分かった。効果はバツグンだ！

「どかに可憐で頭の良い方はいないのかしら。そんな人がいたら私が助かりなのに！」

私は最後の止めの如く声を高めた。これで釣れるか？

「・・・・・」

変化は無い。失敗・・・・か。

「しようがないな～！」

釣れた！ しかも無意味に無い胸を張つて仁王立ちしてゐる。やっぱりバカだった！

「まったく麻耶はアタイがいないと何にも出来ないのね～」

「そ、そうね」

我慢だ私。ここで、ここで殴つては・・・・。

「で、チルノ。情報を教えてほしいんだけど?」

「え～と・・・・・。忘れた」

まるでテヘツと言わんばかりの感じで頭に手を置いて。

「じゃあ情報は無いのね？」

「うん！」

今度は威張った。ねえ、もういいよね？ 我慢しなくてもいいよね？

「ふふふふふふふふ」

「ま、麻耶？」

「ねえ、チルノ。寒い？」

「え？ 寒くは無いけど？」

「そう、寒いんだ？ 聞くといふにぎやかと十の中って暖かいりしいわよ。よかつたわね～」

「麻耶怖い・・・」

「ふふふふ・・・・・・・・。覚悟！」

「す、ストップ！ 今思い出したよ！」

チルノは突然抵抗を始めた。無駄な抵抗を・・・。

「あっちにね。一軒家があつたの。皆そっちに行ってるみたい。ね、ね？ いい情報でしょ？」

「本当ね？」

私は徐々にクールダウンしていくのが分かった。まったく大人気なかつたかもしない。

「う、うん！」

私はチルノの情報を整理しながら周りの様子を窺つた。するとある新しい事が分かった。

「皆同じ向きなのね」

そう、皆桜に向かつて祈りを捧げている点は何も変わつてない。しかしよく観察してみると皆同じ方角を向いて祈っていたのだ。おそらくチルノの情報が正しければその方向に向かつていけばその一軒家があるはず。今の状況を考えれば向かうしか無さそうだ。

「とにかく行つてみるしかなさそうね。行くわよ、チルノ！」

「うん！」

私は方向を確認しながら歩き出した。しばらく歩いていくと丘のうなものが見えてきた。

「あれね」

微かだが家のようなものが見える。どうやらチルノの情報は正しかったようだ。

「チルノもたまには役に立つわね」

私はチルノに向かって話しかけるとチルノは何やら必死に笑いながら手を振っている。

「あんた何やっているの？」

私はチルノが手を振る方向を見た。誰かが手を振っている。

「男の子？あれ・・・でも」

私は心臓の鼓動が高まるのが自覚できた。何故ならその姿は

「優・・・・」

そう、その手を振る少年はまさしく私の最愛の弟そのものだったのだから・・・。

第四章

第四章

私は目を疑つた。まさか本当に死者が蘇るとは思わなかつたからだ。

「優！」

気が付けば私は叫んでいた。すると突然風が吹いた。

「きやあ！」

思わず目を瞑る。すると気が付けば優の姿はそこには無かつた。

「一体どうなつて いるの？」

私は辺りを見渡すが優の姿はどこにも無い。あれは幻だつたのだろうか……。

「ねえ、チルノあなたも見たわよね」

私はチルノに問いただす。何せチルノは手を振つていたのだ。見ていないはずが無いのだ。

「え？ 何が？」

「さつきの男の子よ。あなたも見たでしょ？」

「うん。見たけどそれがどうかしたの？」

どうやら私が見たのは幻ではないようだ。とすると本当に死者が蘇るらしい。

「とにかくこの家に入つてみましよう。この村の不思議について何か分かるかもしないし」

私たちは丘を登り始めた。丘を登りきるとそこからは村が一望できた。相変わらず村は桜で覆われていて見事なものであった。

「こうやって見ると見事なものね」

村を眺めた後、そこにある一軒の家を見る。そこにあるのは何の変わりも無い普通の一軒家だった。

「特に変わった所は無さそうね」

私はチャイムを探すが見つけることは出来なかつた。

「ごめんください」

とりあえず家のドアを叩いてみる。しばらく待つが返答は無い。留守なのだらうか……。

「どうしようか…」

しばらく思案する。勝手に入ることも不可能ではないが、そんな事をしては犯罪である。そんな馬鹿な事は出来ない。

「たのも〜！」

チルノが何も考えず勝手に入つていく。馬鹿がここにいた事をすっかり忘れていた！。とうとうか鍵はかかつてなかつたらしい。

「まったくあの子は…。まあいつか。解決したしね」

私は何か非難されたら全責任をチルノに負わす事を心に決め、チルノの後に続くことにした。

「おじゃまします」

私は靴を脱ぎ、部屋の中に入った。そこはまるで私の現実世界である家の内部そのものだつた。まずこんな家は幻想郷では無いだろう。「まるで私の世界に帰つてきたみたい…」

私は一通り家を眺めた後家主を探す。どうやら本当に留守みたいだ。

「わ〜い、わ〜い」

チルノは家にあるソファーアーが気に入つたのかずつと飛び跳ねている。無邪氣なものである。

「随分やかましいわね。一体どなたかしら？」

声の方を見ると妖艶な姿をした着物姿の女性がいた。おそらくこの人がこの家の家主なのだろう。

「すいません！。勝手にお邪魔して」

私は慌ててチルノを掴み、一緒にお辞儀をする。そりや勝手に自分の家に入られたら気分が悪いだろう。普通なら警察を呼ばれる。…。チルノ、あなたの事は忘れないわ！

「まあいいけどね。あなた誰？」

どうやら勝手に入った事に怒つてはいなによつた。チルノは無事らしいわね。

「私、林麻耶つていいます。この村にはお花見をしに来たのですけど、死者が蘇るつて聞いて、調査しているんです。」

私は自己紹介とここまで来た経緯を説明する。

「調査ね~。何で調査なんてするの？」

どうやら彼女はエミリーといつらしい。優雅に紅茶を飲みながら私は聞いてきた。

「だつて死者が蘇るなんてあり得ないじゃないですか。そんな事が起ころるはずがないですよ」

「あり得ない…、ね」

エミリーは少し考えた後、

「麻耶、あなたこの世界の人間じゃないでしょ？」
と突然言い出した。私はドキリとした。何故分かるんだろう。

「やつぱりね」

私の反応で分かつたエミリーは嬉しそうに笑った。

「この世界はね、色々な事が起ころる。空を飛ぶ人もいれば、魔法を使つことも出来る。だつたら死者が蘇つても不思議ではないのよ」「でも、ここに訪れている人は普通じゃありませんでした。何か、最後の希望にすがりに来たよな…、そんな感じでした」

そう、確かに幻想郷は私の観念では起こりえない事が多く起ころる。不思議な事が起こつてもそれは不思議な事ではないのだろう。しかしここに来ていたお婆ちゃんなどを見ていると何か違和感が捨て切れなかつたのだ。

「それにこの村で死者が蘇るようになつたのは十年前からと聞きました。私はそれが何で変わつたのかを調査したいんです」

「そう…」

エミリーは少し考えた後

「では、あなたはそれの真相に行き着いた時どうしたいの？」
「え？」

「もし仮にその十年前に何かが起こったとしましょう。それはもしかしたら非合法な悪質なものだったのかもしれない。でも今の現状は死者が蘇り、多くの人が亡くなつた者と再び会うことで幸せに満ちている。ここに何の不満があるというの？」

「それは…」

私は言葉に詰まつた。確かにこの村の真相を突き止めたとして、私は何がしたいんだろう。

「それにね、ここは人の希望が集まっている。お金持ちになりたい。綺麗になりたい。そんな事を抱いて来る者もいる。だけどそんな事は本人の努力で叶えられるのよ。でも死者を蘇らせる事は出来ない。それをこの村は出来る。あなたは多くの人の希望を潰すの？」

私は言葉を返す事が出来なかつた。その様子を見たエミリーは徐に紅茶を差し出す。

「あなたがすべき事は調査なんかじゃないわ。あなたは自分の思いを叶えればいいのよ」

私は差し出された紅茶を飲んだ。すると次第に意識が遠くなつていつた。恐らく薬が入つていたのだろう。

「これは…」

「これはあなたの希望を見れるもの。あなたの希望は何？」

「私は…」

私は答えることが出来ず、深い眠りについた。

私は高校生になつても弟が好きだつた。優は中学で野球部に入りエースで4番。キャプテンとして皆をひっぱていた。私はそんな優をとても誇りに思えた。

友人はブラ「ンと冷やかすが、私は気にしたことが無かつた。だつて家族が活躍するのはとても誇らしいこと。恋愛感情なんて微塵も無い。ただ、私は家族として、弟が愛おしく、そして誇らしかつた。

でもそんな事は実際に起る事は無い。だって私が奪ったのだから。

急に視界が変わる。優は血だらけの体で私に言つ。

「あんたが俺の人生を奪ったんだ。俺の輝かしい人生を…」
私は何も言い返せない。間違いなく真実なのだから。優は気がつくとそこにはいない。

「ごめんなさい…。ごめんなさい…」

私はもう居なくなってしまった優に向かつて謝罪を言い続ける。
私は思つた。

優に会いたい。会つて謝りたいと。

気がつくと私は涙を流していた。目の前には相変わらず優雅にエミリーは紅茶を飲んでいた。

「分かったかしら？ あなたの成すべきことが」

「ええ。私は優に会いたい。」

これが私の本心なのだろう。

「ふふふ…。とりあえず今日はもう休みなさい。明日、あなたに会わせて上げるわ。あなたの最愛の人にな」

気がつけば既に日が暮れていた。ここはエミリーに従つた方が賢明であろう。

「そういうばチルノは？」

あの無邪気な声が聞こえない。どうしたのだろうか…。

「あの子ならずつと寝てるわよ…」

エミリーが指差す方向に日を向けると、ソファーで横になりながら口を大きく開けてぐつすり眠るチルノがいた。

「あなたはそこに部屋を使ってね。」

私はエミリーが指差した部屋に入る。そこは布団がひいてあるだけの質素な部屋だった。入る直前エミリーの

「いい夢を…」

の言葉がやけに頭に残つた。私は布団に入ると直ぐに眠りについた。

「はつー！」

私は思わず飛び起きた。心臓がバクバク言つてゐるのが分かる。

「何、あの夢…」

もしかしたら薬の影響が残つていたのかも知れない。しかしその可能性を一蹴することにした。だつてそれは

「私がそういう願望をもつていてるって事じゃない！」

私は赤面しながら、夢だと必死に否定した。無かつたことにしてよつー！

「おはよづじぞこます」

私はエミリーに挨拶する。

「おはよづ！」

エミリーが紅茶を飲みながら振り返る。この人は紅茶をどれだけ飲むのだろうと暢気に考えた。

「いい夢は見れた？」

「え、ええ…」

私ははぐらかす。

「それはよかつたわ。」

「ええ。ところでチルノを知りませんか？」

ソファーはもぬけの殻だ。どこに行つたのだろう？

「あの子なら外で遊んでるわよ？」

そう言われて私は家の外に出てみた。近くに遊び場があるらしい。

「つー！」

チルノの怒る声がする。ビッシュアセーハシ。

「まったくチルノは…」

私は近づこうとする

「お前本当にバカなんだな～」

とこの男の子の声がした。

「まさか…」

私は思わず駆け出した。あの声を聞き間違えるはずがない。だって
あれは

「優！」

私の最愛の弟の声なのだから。

近づくと優はチルノと野球して遊んでいた。優は死んでしまった当
時と変わらない容姿をしていた。

「いぐぞ～」

「来い！」

優がピッチャーでチルノがバッター。しかし優のいたずらでチルノ
はまったく打てなかつた。

「お前はバカだな～」

「バカじやないもん！」

私はしばらく眺めていたが、

「あ、お姉ちゃん！」

優が私を見つけて駆け寄ってきた。私は久々の対面でびっくり

いかと戸惑つていると

「へへ、久しぶり。お姉ちゃん！」

私は弟と奇跡の再会を果たした。

第五章

第5章

私は愛しの弟と対面したのにもかかわらず、思った以上に動搖したいたのかすぐに返事をすることが出来なかつた。

「？ どうしたの、お姉ちゃん？」

「あ、ああ…。なんでもないわ。久しぶりね、優なんとか笑顔を作り、優に返事をした。

「お姉ちゃん大きくなつたね～。僕と全然違つよ～」

「それはそうよ。あれから何年経つたと思つていいのよ？」「違う。私は優にこんな事を言いたかつたのではない。しかし言葉にすることは出来なかつた。

「そりだよね～。でもよかつた。お姉ちゃん元気そつで」「優も元気そうね…。ってこれは何か変か～」

「変だよ～。だって僕は死んでるんだもん」

優は無邪気に笑いながら話す。私は優の顔を直視できなかつた。

「お姉ちゃん、ちょっと用事があるから行くね」

「うん。僕はまだあのバカと遊んでいるよ」

遠くからバカつて言うなと叫ぶチルノの声がする。優は慌ててチルノの方に駆けていった。

「夢にまで見た最愛の弟との『』対面だつていうのに随分浮かない顔ね」

私は一度エミリーの家に戻らうと歩いていると、エミリーとすれ違つて話しかけられた。

「ちよつとうまく話せなくて…。言いたいことはたくさんあるのに…」

「まあ、長い年月を過ごしてきたのならそれも当然かもね」

エミリーはそれだけ言つと去つていつてしまつた。

「長い年月…、ね」

私は家の中に入りイスに腰をかけて呴いた。確かに長い年月だつた。優を失つた頃の私は記憶が殆ど無い。優を失う時を目撃し、そしてその現実を受け入れられず泣いていたからだ。

その頃の私は、親からいつも同じことしか言わなかつたと言つていた。それは

「『めんなさい』

何度言つても届かない相手。だから私は何度も、何度も言い続けたのかかもしれない。いつか届くよつこと。

「ただいま」

そうこうしている内に優とチルノが帰つてきた。一人とも泥だらけである。

「あなたたち汚いわね～。早くお風呂入つてきなさいよ」

「は～い」

二人は仲良く返事してお風呂に入りに行つた。それは傍目から見たらまるで兄妹のようだつた。

「もう私はそれだけ年をとつてしまつたのね…」

その後、私と優、チルノとエミリーで食事をとつた。私はあまり話を振ることはせず、優が今日どんなことをしたのかを楽しそうに話し、それを聞いたチルノが一々反応をする。エミリーは微笑みながら聞いているだけであつた。

そして夜、私はエミリーの計らいで、優と同じ布団で寝ることになつた。少し一人で寝るには狭く思えたが、くつつくことで得られる優の温もりが、優が今この世で生があるということを感じさせてくれた。

「お姉ちゃんと寝るの久しぶりだね～」

優は嬉しそうに言つ。

「そうね～。あの頃はいつも一緒に寝てたもんね」

お互いの布団は用意されていたが、いつも気がつけばひらひらかの布団に入り一緒に寝ていた。

「うん。僕また一緒にお姉ちゃんと寝ることが出来て本当に幸せだよ」

「私も。また優に会えて本当に良かったわ」

「これは私の本心だった。」

「うん。でもね、お姉ちゃん」

優は私の目をしつかり見て

「お姉ちゃんは夢から覚めなきやいけないんだよ」と言った。

「え？」

私は何を言われているのか分からなかつた。これは私の夢なのだろうか？

「ううん…。これは現実だよ。夢じゃない。でも僕はお姉ちゃんの夢なんだ。そして夢はいつか覚めるもの。ううん、覚めなくちゃいけないんだ」

「ゆ、優？ 私、何を言つているか分からないんだけど…」

「僕たちは確かに生き返ることができた。でもそれはしてはいけない事なんだよ。だからお姉ちゃんにこの夢を終わらせてほしいんだ」「終わらせるつて言つても…。どうしたらいいの？」

「この夢は村にある大きな桜によつて起きているんだ。だからあの桜が無くなればこの夢は終わるよ」

「で、でも…。例え夢であつたとしても今、亡くなつた人が生き返つていて。それはとても幸せな事でしょ？ 誰も傷つかないし、皆幸せになつていてるわ」

「確かにね。でも分かっているでしょ？ 死んでいる人は生き返られないんだよ」

まるで聞き分けの無い子供に親が納得させていくかのようだった。しばらくお互い話さないでいた。するとポツリと

「ねえ、お姉ちゃん。この夢はね」と話しか始めた。

「うん…」

私は優に話を促した。

「確かに死んでいた人は生き返るよ。でもね、長く続かないんだ」「え？」

「この夢は3日しか続かない。それ以上経つと消えてしまつんだ」「ま、待つてよ。ってことは優も？」

「うん。あと2日したら消えちゃうんだ」

「そ、そんな…」

まさかそんな事が…。しかし実際の当事者である優である。その話は正しいのだろ？。

「でも、それだとどうして桜の話になるの？ 優の話だと、3日経てば夢は覚めてしまうんじゃないの？」

「うん…。確かにね。でもね、生き返った人は誰に知らされるわけでもないけど、ある2つの事を教わるんだ」

「2つの事？」

「そう…。1つは自分が3日しか生き返られないって事」「なるほど…。2つ目は…？」

「2つ目は、自分が完全に生き返られる方法があるって事」「生き返るって…。本当なの！？」

私は思わず身を乗り出すようこじて聞いてしまった。それほど今までに衝撃の事実だったのだ。

「うん。でもだからこそ僕はお姉ちゃんにとめて欲しいんだ」「意味が分からぬ…。そんな事止めるはずがないじゃないのよ…」「これから話すよ。どうして、僕がとめて欲しいのか…」

その後、私は優から夢の真実を聞くことになる。それは到底信じられるような話ではなく、また、私はそれを聞いて優の望む事を行える自身は無かつた…。

第六章

第六章

優が蘇つてから2日目が来た。優の話で言つと残り今日を入れるとあと2日である。

「おはよ～、お姉ちゃん」

私が外で座つて考えていると、寝ぼけ顔で優が顔を出した。

「おはよ」

私は短く挨拶を済ませた。まだ自分の考えがうまくまとまっておらず、なんて優に言つたらいいのか分からなかつたのだ。

「やつぱり悩んでる？」

「当たり前じやない…。あんな事を言われたら誰だつて悩むわよ」「だよね～。でも僕は信じているよ。お姉ちゃんが終わらせてくれるって」

優はそうこうと笑顔で家の中に入つていった。

「はあ…」

私は今日何度も分からぬため息をついた。

「私がそんな事…できるわけ無いじゃない」

昨日の夜に優が話した事が頭を離れず、横で優はすやすやす眠る中私は殆ど眠ることは出来なかつた。

「散歩…行つてこようかな」

私は立ち上がり、お花見をしていた場所に気分転換に散歩しに行くことにした。

「あいかわらず綺麗ね～」

風で舞う桜吹雪が幻想的だつた。それを眺めつつ歩いていくと、大きな桜の木が出てきた。

「この木が原因だつたなんてね…」

私はその桜の木に寄りかかりながら昨日の優の話を思い返した。

「あのね、生き返った人はある方法で完全に生き返ることが出来るんだ。でもそれは3日間の内にしなければならないの」「自分が仮で生き返ったうちにしなければならないのね？」

「うん。もしこのシステムがただ3日間生き返られるだけなら、もしかしたら本当にすばらしいシステムだつたのかもしない」

「そうね…。例え短い間であつたとしても死んでしまった人に会えるのだからね」

「そう。でも生き返った人はどう思うのかな?」

「生き返った人?」

「うん。生きている人が羨ましく思えるんじゃないかな。もつと生きたいと思うんじゃないかな」

「確かに。そう思うでしょうね」

「でしょ? そして生き返った人は自分が本当に生き返る方法を知つていて。だからその行動を止める事はできないんだ」

「それで、その方法つて何なの?」

「それは…」

優は少し考えた素振りを見せた。そして思い切つたように

「喰うんだ」

と言つた。

「喰う…」

「そう。生を持つてゐる者から奪うことによつて生き返つたものは本当の意味で生き返ることができ。そしてそれは自分が最も愛する者や、近しい者ほどいいんだ」

「それつて…。まさか!」

「そう、僕の場合、お姉ちゃんになる」「そんな…」

私の命と引き換えに優は生命を得る。そんな事実があつたなんて…。「僕はそんな事をしてまで生き返りたくは無いよ。でも3日目が終

わりに近づくと、恐らく本能的に体が動いてしまうんだ。それまでにとめて欲しいんだ。誰でもない、お姉ちゃん」「

「でもそれじゃあ！」

「うん。僕は死んでしまったね。でもいいんだ。僕はもう既に死んでいるんだから。お姉ちゃんとまた話すことが出来ただけで幸せだよ。私は何と返したらいいか分からなかつた。

「私の命をあげれば優は生き返られる…」

優はそんな事は望んでいないといった。あの子がそう言つているのは本心だろう。しかし、この問題を解決するといふことは、また優を私が殺すことと同義だ。そんな事は私にはできない。

「まったく…。どうしたらしいの？」

「お～い、麻耶！」

遠くからチルノの声がする。トロトロ走つてきた後

「朝ごはんだつて。早くきなよ～」

「分かったわ。今行くから」

私は無邪気なチルノの顔を眺めながらエミリーの家に引き返した。

朝食はいつも通りの光景だった。優は楽しそうにチルノと話をしながら食事をし、エミリーは微笑みながら紅茶を飲む。ただ私は暢気に会話する気にはなれなかつた。

「あら？ 随分元気が無いのね。食事、口に合わなかつたかしら？」エミリーが私の様子が変なことに気がついたのか、心配そうに声をかけてきた。

「い、いえ！ そんな事はないですよ。とってもおいしいです、

私は心配をかけないように慌てて食事を進めた。そういうえば、エミリーはあの桜の事実を知っているのだろうか？

「チルノ、また野球やろうぜ～」

優は既に食べ終わったのか、チルノを遊びに誘つていた。

「ふふん、いい度胸ね。今度こそアタイが負けの意味を教えてあげるわ」

チルノが無駄に威勢よく返事していた。本当にこの短い間に仲良くなったようだ。

「何をバカなこと言つているんだよ。だからお前はバカなんだ」「バカっていうなー！」

二人は慌しく外に飛び出していった。

「まつたく、もう少しおとなしくできないのかしら…」

私は呆れていると

「それが子供と/orうものよ。微笑ましくていいじゃない？」まるで母親のような感じでエミリーは微笑んでいた。

「それで、あなたは何を悩んでいるの？」

エミリーは紅茶を飲みながら聞いてきた。

「え？」

「私でよかつたら相談に乗るわ。大したことはできないけどね」「い、いえ…」

このまま悩んでいてもどうせ答えは出無そうなのだ。どうせなら聞いてみるのもいいかもしねない。

「実は…」

私は優から聞いた事實を話してみた。

「なるほどね…」

話を一通り話した後、エミリーは少し考え

「そこまで知つていてるんだ」

と言つた。この言葉の意味を読み解く限り、殆ど知つていたのだろう。

「エミリーも知つていたのね？」

「ええ。だつてこの桜は私が作つたんだもん」

「え？」

「正確には、人々が願つた思いが私を作り、そして私が作つたんだけどね」

「ちょ、ちょつと待つて！」

「一体どういう事なのか。あまりの事実の多さに頭がついていかなくなってきた。

「じゃ、じゃあHミリーは人間ではないのね？」

「ええ。思念体というのが正しいかもね」

「で、桜を作ったのはHミリーなのよね？」

「そう言つたわよ」

「じゃあ桜の仕組みを変える事はできるわよね、作った本人なんだから」

もしこの仕組みが変わるのなら優の事も希望が出来る！

「ああ、それは無理な話ね」

しかし話はそこまでうまくは無いようだ。

「どうして？ 作れたなら仕組みを変える事はできるんでしょう？」

「私は人々の死んだものを蘇らせるという思いから存在した者。だから仕組みを変えるほどの力は無いわ」

「そつ…」

思わず落胆する。何か方法があればいいのだけれど…。

「まあ桜が消える時、私も消える事になるんだけど私はどっちでもいいわ」

「え？ そうなの？」

「ええ。桜を作る為に私は存在したのだから、もし桜がなくなつたらいなくなるのも当然でしょ？」

「ま、まあ…。でも、いいの？」

それは死ぬ事と同じなのだ。

「ええ。作つたのが人なら消すのも人なのよ。私はそう割り切つているから」

どうやら本心で言つているようだ。

「あなたが決めなくちゃいけない。これはあなたに話された問題なのだから」

「ええ…、分かっているわ」

少し風に当たるつと外に出ようとした時

「一つだけ」

とHミリーに声をかけられた。

「え？」

「一つだけあなたに言つておくわ。死んでしまつた人を生き返らせる時、ある思いで蘇るの。たとえばあれを作つてあげたかった、あれをしてあげたかったみたいなね。きっとあなたもそうだったはず。それをしてあげてね。どうなろうともあと少しの時間しか残されていないのだから」

「してあげたかった…か」

私はドアを閉め、外に出た。優しい風が私の体を撫でた。
Hミリーの言つていた事を考える。恐らく私はしてあげたかった思いで優が蘇つたわけではないと思つた。そして私がどうしたかったのかは分かつていて。

「私は優に謝りたいのよ」

あの時優に言つことが出来なかつた事。幼い頃伝えたかった言葉。これをどうしても伝えたかったのだ。

私はまた桜を見に散歩に来ていた。桜を見ていると

「きやあ~~~~~！」

と突如悲鳴が聞こえてきた。

「な、何？」

私は慌てて声が聞こえてきた場所を手指した。するとそこではまさに生きたものを喰う事で生を受ける瞬間だった。

「うう…」

その者の目は普通じゃなかつた。赤く充血し、その者を貪るように喰つていた。

「うお~~~~~」

雄たけびを上げると体中が光に満ちて辺りがまぶしくなつた。

「くつ！」

私はあまりのまぶしさで目を開けていることが出来なかつた。

光が收まるとそこには先ほどの者が普通に立つていて。目は正常になつており、特に異常は見られなかつた。

「あれが優が言つていたことなのね…」

しばらくするとその者は歩いてしまつた。そこには何も残つていなかつた。

「優も、ああなたるというの？」

私は想像した。優はそんなことは望んでいないといった。しかし本能で行つてしまつとも。そして優しい優のことだ。きっと後で後悔してしまうだらう。

「するしか…ないのよね」

私は直ぐに折れそうな決心をした。だつてそれはとても悲しい決断なのだから。

私はチルノ達があそぶ公園に来ていた。

「ねえ、私も入れてよ」

「いいよ」

「ふん、じゃあ麻耶は私のしもべね

「ふん！」

「あいた！」

「何か言つた？」

「な、何にも？」

私はその後、3人で童心に帰つたように遊んだ。まあ私以外は子供だつたのだけれど。

その夜、私は優と同じ布団にいた。

「決心してくれたんだね、お姉ちゃん

「ええ…」

「ごめんね、お姉ちゃん

「優…」

私が心が揺れているのがわかつて心配してくれたのだらう。

「明日が最後。一日楽しもうね」

「ええ、そうね」

私は可愛い寝顔の優を見ながら思つた。この選択が正しいものでありますよしつけて。

第七章

第七章

運命の三日田の朝が来た。

「おはよー、お姉ちゃん」

「ええ、おはよう」

私は普通どおりに挨拶した。この何気ない挨拶がもう一度と出来なくなる。私はそれが切なくて仕方が無かつた。

「今日は何して遊ぼうか? 僕、最後だからお姉ちゃんといつぱい遊びたいな~」

「もちろんよ。優がしたい」とこいつぱいしようね~」

「うん!」

朝食の位置について。この光景も今日で見納めになるかと思つて…。何だか全ての光景が私はとても愛おしく思えた。

「いじりそつさま~」

「はい、おそまつさまでした」

「はい、おそまつさまでした」

私たちは朝食を食べ終わり、遊びに行くことにした。

「じゃあお姉ちゃん、僕先に行っているね。チルノも早く来いよ」まだ黙々と食べているチルノに声をかけ、優は外に飛び出していった。

「ま、待つてよ~」

チルノは慌てて口の中に食べ物を詰め込み、優の後を追つて飛び出していく。

「まったくあの子ははしたないんだから……」

私は呆れないと

「ふふ、いいじゃない。可愛いと思うわよ?」

エミリーは優雅に紅茶を飲みながら微笑んでいる。どうでもいいが、

Hミコーは紅茶をじんだけ飲むのだろう? 体が紅茶で出来ているのかしら?.

「それで、あなたは決心したのかしら?..」

「ええ」

「ふふ、まだ悩んでいるのね?」

簡単に見抜かれた事が少し悔しかつた。

「まああなたの決めたことに何も異論は無いわ。私も、そしてあの子も…ね」

「うん。ありがとう、Hミコー」

「お礼を言われる」とじやないわ

「じゃあ私、外に行つてくるから

「はい、いつてらっしゃい」

私は支度を済ませ優の元に行くことにした。

「おりや~」

「あつ~」

私たちにはまず缶けりをした。近くに空き缶が転がっていたので優が提案したのだ。

「チルノ、お前弱すぎじゃないか?」

優が呆れたようにチルノに言つ。

「うう…そんなことないもん!」

チルノは威張つて言つが、明らかに弱すぎた。

まず、チルノは隠れるのが苦手すぎる。うまく障害物に隠れては見るのが、それはそこにあるまじきものに隠れるのだ。そして私が優が鬼になった時、お互にそんな所には隠れない。したがつてそれは必然的にチルノになり、結果直ぐに見つかる。そして足で敵わないチルノは結果捕まってしまうのだ。

「これじゃ面白いから、だるませんが転んだをしようぜ?..」

「い、い、いよ!」んど!そアタイが圧勝をしてやるんだから!..」

まあ結果は言うまでもなかつた。当然チルノの惨敗だ。何せ、チルノがいる時、バカというだけで反応しアウトなのだ。

「お前、本当にバカなんだな~」

優が愉快そうに言つ。私も改めて思つた。こいつはバカだと。

「そ、そんな~…」

チルノも自分で自分に呆れているかのようだつた。まあ、これだけの事実を突きつけられたらショックも受けれるだろう…。

「でも今度こそアタイが勝つよ~ こんどは何をする?」

決してそんな事は無かつた! まあこんな事でへこたれない所がチルノの良い所なのだけれど。まあ、ああはなりたくはないが…。

「う~ん、じゃあ次はね~」

その後私たちは優が提案する遊びに付き合つた。全てにおいてチルノは惨敗したのだが、それでも私たちは楽しかつた。

「そろそろ昼食にしましようか?」

お昼を過ぎた頃、私はそう提案した。

「うん! 僕、お腹空いやつたよ~」

「アタイも~」

私は家を出る前にエミリーから借りたレジヤーシートを広げ、おしおりを一人に手渡した。

「はい、じゃ~ん!」

一人が手を吹き終わつた後、私は弁当を広げた。

「うわ~」

「おいしそ~」

二人は目を輝かして弁当を見ている。

「これ全部お姉ちゃんが作つたの?」

「ええ、ただ味は保障しないわよ?」

「お姉ちゃんの作ったものなら当然美味しいよ~」

「それは言ひすぎよ」

私は照れたように言つた。だがその言葉がとても嬉しかった。

「はやく食べよ～」

「どうやらチルノは待ちきれないのかイライラしている。

「はいはい。じゃあいただきます」

「「「いただきます！」」

二人は争うように弁当を食べ始めた。

「二人とも、沢山あるんだからゆっくり食べなさいよ？」

「はい」

「モグモグ…（口クン）」

私は二人を呆れながら見ながらも、弁当を作ってきて本当に良かつた。

「「「おそうさま～」」

二人は同時に食べ終わり、沢山用意した弁当は全て空になった。

「はい、おそまつさまでした」

私は片付けていると一人は横になっていた。

「アタイ、眠くなってきた～」

「僕も～」

「ふふ、じゃあ少し仮寝でもしましょうか？ 気持ちいいもんね」

「うん」

「スヤスヤ」

既にチルノは寝ていた。私も少しウトウトしてきた。優との時間が減ってしまう事は残念だったが、この時間も私は良いと思つた。

「おやすみ、優」

「おやすみ、お姉ちゃん」

私は穏やかな眠りについた…。

「うう…」

私は何かの音に目を覚ました。それほつめの声のようだった。

「うん…何かしら？」

私は目を開けると、そこでは優が苦しそうに体を震わせていた。目

が赤く光り、いつもの優と様子が違うのは一目瞭然だつた。そしてその様子は依然見た人を喰う者と酷似していた。

「まさか！」

気がつけば既に日が傾き始めている。優の、本能による生への執着、すなわち人を喰おうとする衝動が始まりかけているのだ。

「だ、大丈夫？」優

私は優に駆け寄ると

「ああああああああ」

優は何かを良いながら私に負いかぶさり首を絞め、口を開けると何かを吸い始めた。すると私は途端力が入らなくなつた。

「優…！」

私は必死に優を呼び続けた。私の声が届くよつにって。

「う…ん…。あれ？ もう？」

どうやらチルノが起きたようだ。するとその事で急に力が入るようになつた。

「う…、ぐす…ごめん、お姉ちゃん…」

見ると優が泣いていた。行いたくない行動を抑えきれずしてしまつた事への後悔が溢れているんだろつ。

「僕、何も考えられなくなつて…。お姉ちゃんを見たら急に…。ごめん…、ごめんなさいお姉ちゃん…」

「いいの…、いいのよ、優。だつてあなたの所為じゃないんだから

私は大丈夫だと伝えるように笑顔で優をあやす様に頭を撫でた。

「うわああああああああああああん」

優は大粒の涙を流した。優がこんなに泣いたのはいつだつただろうか。優は優しく、そして同時に強かつた。人前で泣いたりすることは殆ど無かつた。

「待つててね、優。直ぐに解放してあげるから」

私はもう迷いは無かつた。確かに私が優を消すことは殺すことと同じかもしれない。確かに今ここで優は生きているのだから。でも私

はそれ以上に優がこんなに苦しんでいる姿は見たくなかった。

「行こう! 桜に」

「うん…」

私は泣く優を連れてあの大きな桜に向かうことにした。

「ほらチルノ行くわよ!」

「えつと…何が何だか…まあいつか」

相変わらず能天気なチルノである。だが私はその能天気さが何も聞いてこないので助かつた。

「ここ…ね…」

「うん」

私たちは大きな桜の木の前に来ていた。既に日は傾き夜になつていた。優はさつきから体が震え、汗が止まらない。既に限界が近いのだろう。

「いくわよ、優」

「お願ひ、お姉ちゃん…」

私はポケットからライターを取り出した。それはエミリーから受け取つたものだ。

「これで桜を燃やせるわ。そうしたら全てが終わるわ

「ありがとう、エミリー」

「いいの。だつて私はあなたたちが気に入つたから」

私はライターをつけた。それは青く光り輝く炎だつた。私が火を近づけようとすると

「ヤメロ…」

「つ！」

何者かの声がしたので振り向くと、そこには依然見た者がいた。目が血走っている。

「モヤスナ…。 ヤメロ…」

「モヤスナ…。ヤメロ…」

気がつけば周りに人が集まっている。まるで亡靈だ。一体何人いるんだ！

「チルノ、アンタに頼みがあるの？」
「何？」

「あいつらアンタをバカにしててね。あいつら全員懲らしめて欲しいの。出来る？」

「何？！ 当然よ！」

チルノは走つていって

「アイシクルフォール！」

と攻撃をしかけた。あまりの事に戸惑った亡靈も自分たちの危機と
いう事を悟り、チルノに目標を定めた。

「頼むわよ、チルノ」

私は再び火をつけ、桜に近づけた。火は少しずつ桜につき、すぐに
広がつていった。

ザワザワと大気が震える感じがした。それはまるで桜が悲鳴を上げ
ているかのようだった。

「ありがとう、お姉ちゃん」

「優…」

優の姿が光つており、透けて見えた。消える前兆なのだろう。

「私は優に言いたかったことがあるの…」

私は最後の機会だと想い、告白することにした。たとえ非難されることになろうとも。

「何？」

優は微笑みながら答える。

「ごめんなさい…」

「え？」

私は頭を下げる優に言った。優は戸惑つたように

「な、なんでお姉ちゃんが頭下げているの？」

「だって、私のせいで優は死んじゃった。私があの時、買い物に誘

わなければ、もっと横断歩道で注意していれば優は死なかつたかもしれない。それに私さえいなければ！」

「お姉ちゃん！」

私は呆然としてしまつた。私、優に殴られたの？ そして優がこんなに怒つた所を初めて私は見た。

「お姉ちゃんにそんな事言つて欲しくなかつた！ 僕はあの時の行動を後悔してないし、お姉ちゃんがいてくれて本当に良かつた。そんな事を言わないでよ！」

「優…」

「お姉ちゃんはどう思つていたかは分からぬけど、僕は満足だよ。だつて」

優は笑顔で

「だつて大好きなお姉ちゃんを守れたんだもん」

「う、うう…」

私は大粒の涙を流した。私はなんて幸せ者だったのだろう。こんなに優しい弟がいたのだから。

「だからお姉ちゃんも、もう苦しまないで。僕は怒つてもいいし、恨んでもいいんだから」

その時私は悟つた。私は優に謝りたかったのではい、優に許して欲しかつたんだ、と。あの時の行動を許して欲しかつた思いが優を蘇らせたんだと。

「あ、もう時間だ」

「そう…」

「うん。ね、お姉ちゃん。最後に僕と約束してくれない？」

「約束？」

「うん。僕と二つ約束して」

「いいわ。何？」

「一つは僕の事をもう悩まないで」

「わかつたわ。悩むと優にまた怒られそうだもんね」

「うん！ 僕、お姉ちゃんの事怒るから！」「…」

「ふふ、分かつたわ。それで、一いつ皿は？」

「一いつ皿は、幸せになつて」

「え？」

私はキヨトンとしてしまつた。

「お姉ちゃんには幸せになつて欲しいんだ。誰でもない、僕の大好きなお姉ちゃんに」

「優…」

「ね、守れそう？」

私は即答した

「当たり前よ」

だつて私は！

「私は誰よりも優が大好きなお姉ちゃんよ！ 約束は守るわ。優の事はもう悩まず、そして幸せになるつて！」

「ありがとう。もうお別れだ…」

夕の光は大きくなり、もう殆ど優の姿は見えなくなつていた。

「バイバイ、お姉ちゃん」

「バイバイ、優」

直後光が弾けて優はいなくなつた。桜は完全に燃え、そこには何も残つていなかつた。

「あ、あれ？ あいつらは？」

亡靈と戦つていたチルノは突然いなくなつたことで困惑ついていた。どうやら桜の消滅とともにいなくなつたようだ。どうやらたとえ喰つていたとしても桜が消滅すると消えてしみつようだ。

「もういないわよ。あ、それとチルノ」

「何？」

私はチルノの頭を撫で

「ありがとう。優とちゃんとお別れできたわ」

「？ う、うん」

どうやら分かつてないようだ。まあ、後でゆっくり話してあげるとしよう。

「どうやら終わつたようね」

「Hミリー…」

Hミリーがそこにいた。桜の消滅と共に存在の維持ができないのだろう、酷く辛そうだ。

「私もこれでお別れ、楽しかつたわ」

「私も」

「え？ Hミリーお別れなの？」

まったく状況が把握出来てないチルノが不安げに尋ねる。

「ええ。私は帰らなければならないの。ごめんね、チルノ」

「うう…、そんな~」

「チルノ、バイバイしよ？」

私はあやす様にチルノの頭を撫でた。

「うん…バイバイ

「はい、バイバイ」

Hミリーは私に向きなおし、

「これで死者が蘇ることは無くなる。この村は普通の村になるわ」

「分かつたわ

「あなたと会えて良かつたわ

「それはお互い様よ

私は笑いながら言つた。

「ふふ、そうね」

私たち握手した。

「元氣でね」

「Hミリーも…ってこれは変かな？」

「変ね。でもいいわ。じゃあね」

「ええ

するとHミリーの姿は見えなくなり握手していた私の手だけ残つた。

「ふ~」

私は深呼吸すると
「じゃあ帰るうか~」

「ふ~」

私は深呼吸すると

「じゃあ帰るうか~」

「うん！」

私たちは家に帰ることにした。村に咲き誇る桜がとても綺麗だった。

村を歩いていると

「ま、待つて～！」

と声がある。

「あ、靈夢」

チルノが口にする。どうやら本当に靈夢のようだ。すっかり忘れていた。

「酷いじゃない、麻耶。私を忘れるなんて！」

「う、ごめん…。すっかり忘れてたわ」

「まったく…気がついたら変な世界にいるわ、戻ってきたら誰もいないわで大変だったのよ？」

「まあいいじゃない。それより靈夢」

「うん？ 何？」

「変な世界ってどんな所だったの？」

「あ、アタイも気になる～」

「置いていったから教えてあげない！」

どうやら靈夢はくそを曲げてしまつたようだ。これはしづらしく間を置いたほうがよさそうだ。

「じゃあ帰りましょ～！」

「うん！」

「はあ…。私何しにここに来たのかしら？」

私たちは一路家へ帰ることにした。色々な事に遭遇したけど、結果的に私は来てよかつたと思えた。

まさに結果オーライ！

Hピローグ

「で、どうじゅう」とですか?」

「え、えつと…」

私は正座をして幽々子さんの前に座っていた。どうしてこうなったか、少し戻つて説明しよう。

「ただいま」

私は家に帰つた後、場所を教えてくれた幽々子さんにお礼を言ひに屋敷を訪れた。

「おかえりなさい」

幽々子さんは縁側でお茶を飲んでいた。相変わらず絵になる人だ。「あら麻耶さん。帰つてきてたんですね」

妖夢は庭で木を切つていた。私に気づいて作業を止め、こっちに来てくれた。

「麻耶さん、桜はどうでしたか?」

「ええ、とっても綺麗だつたわ。幽々子さん、場所を教えてくれてありがとうございました」

「いいえ、それで麻耶さん。例の物をお願いします」「例のもの?」

はて? そんなものあつたかしら?

「まさか忘れていたなんてことはないですよね?」

「そんなんまさか?。ちょっと待つてくださいね~」

私は頭を必死に働かせた。何だ? 例の物つて…

「桜の写真ですよ、麻耶さん」

妖夢が耳打ちしてくれた。あ!

「なんだ~、あれですか。もちろん…」

そこで私は気がついた。写真…全然撮つてない！

「えつと…それが…」

「ふふふ、すっかり忘れていたようですね」

「いや、そんな事はないですよ…」

「すいません幽々子さん、笑顔が怖いです！」

「ちょっとそこに正座してもらえますか？」

「幽々子さん、実はですね…」

「正座！」

「「はい…」」

何故か妖夢も返事し、二人そろって正座することになってしまった。

「まったく…」の数日間私がどれだけ楽しみにしてたと思つんで
すか？」「すいません…」

かれこれ30分は幽々子さんのお小言を聞いている。さすがに私の
足も限界を向かえそうだ。

「まあお説教はこのぐらごにしておきましょうつか

「よ、よかつた…」

「さて、麻耶さんの罰ですが…」

「ば、罰…ですか？」

「当然じゃないですか～。いいですね？」

「は、はい。謹んでお受けします！」

「ここで断れば何があるか分からな～」。啖けたほつが懸命だと本能が
告げていた。

「では罰ですが、麻耶さんには蔵の掃除をしてもらいます」

「蔵の掃除ですか？」

「ええ。近々蔵を掃除しようと思つていたんです。なので麻耶さん
にはそれをしてもらおうと思つます」

「わかりました」

私は小声で

「よかつた～。どんな酷いことされたかと思つたけど、これなら楽

勝ね」

「何か言いましたか？」

「い、いえ！　早速やらせていただきます！」

私はダッシュで蔵に向かつた。わざわざやるに限る！

「ああ、麻耶さん？」

幽々子さんが何か言つた気がしたが、私には聞こえなかつた。

「明日からでいいと申おつとしたのですが…。まあいいですかね」

その事に気づいたのは掃除を終わらせたら5時間後の事だった…。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4875j/>

東方夢想花

2010年10月10日18時54分発行